

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：42718

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520217

研究課題名（和文） 林鷺峰交遊圏の研究

研究課題名（英文） A STUDY OF FRIENDSHIP ZONE OF HAYASHI GAHOO

研究代表者

伊藤 善隆 (ITO YOSHITAKA)

湘北短期大学・総合ビジネス学科・准教授

研究者番号：30287940

研究成果の概要（和文）：林鷺峰の交遊圏について調査を進め、近世前期の林家林門の漢学者たちが、詩文によるコミュニケーションを持っていたこと、また彼らのネットワークで共有されていた価値観や情報が、中国明末に活躍した「山人派、文人たちの文化から強い影響を受けていたことを検証することができた。多色摺資料として重要視される詩箋資料や、従来注目されることがなかった林永喜や石川子復の自筆資料などの文献を翻刻・紹介することができた。

研究成果の概要（英文）：I was investigating about the friendship zone of Hayashi Gahoo. The main outcomes is the following two points. The first is that the Rinke-Rinmon Confucian scholar of the early modern period has had a communication with poetry. The second is that they were heavily influenced by the Sanjin-ha school literati of late Ming. In addition, I reprint a valuable literature, such as autograph material. Until now, the literature of Ishikawa Shifuku and Hayashi Eiki has not been little attention.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世文学・漢文学

1. 研究開始当初の背景

従来の近世漢文学研究の成果は、中期・後期を対象としたものに偏っている。前期の漢文学においては、朱子学の導入という思想史上の問題のみが大きく扱われ、文学的・文化的側面は考察されることが少なかった。また、その評価も不当に低かったと言ってよい。その理由として、以下の3点を指摘することができる。

(1) 従来の近世漢文学研究では、詩文の研究に重きがおかれた。そのため、漢文学者が漢詩人として活動することが顕著となる近世中期以降（すなわち、荻生徂徠たち「護園派、以降）の諸派の漢学者たちが主たる研究対象とされてきた。

つまり、従来の研究において、近世前期の漢詩人の中であって高い評価を得ているのは、石川丈山と深草元政のみであったと指摘

して良いだろう。

(2) 丈山と元政が、いわゆる「隠逸」として権力に背を向けて生きた人物であるのに対して、近世前期に活動した林家林門の漢学者たちは、幕府に出仕するなど、権力に近い存在であった。

そのため、彼らの詩文は「社交風流」の具に過ぎないという否定的な先入観（中村幸彦「近世初期の漢文学」(『国語と国文学』360号、1954)など)が持たれていた。すなわち、(1)に指摘した研究状況が、長年そのままになった理由の一つとして、この先入観の存在をあげることができよう。

(3) 林家林門の詩集・文集は膨大な分量であるため、全体を見渡した分析を行うことは困難であった。

たとえば、林家に限って見ても、羅山・鷺峰・読耕斎・梅洞・鳳岡の詩文集のうち、翻刻あるいは影印が備わるものは、羅山の詩文集(翻刻)と、鷺峰と読耕斎の文集(影印)に過ぎない。

こうした未整備な研究環境では、全体を見渡して研究を遂行することは困難である。そのため、今なお多数存在すると推測される同時代の漢学者たちの文献の調査・発見もなかなか活性化せず、また既に存在が知られる文献であっても、研究の俎上に載せることは難しかった。

以上のような従来の研究状況に対して、研究代表者は近世前期における明末文化の影響に注目し、近世前期の林家林門の漢学者たちが、明末の中国で活躍した「山人派」文人たちの隠逸趣味・文人趣味から強く影響を受けていたことを検証してきた。

そして、従来は近世中期以降の問題とされてきた「江戸文人」の萌芽を、早く近世前期の林家林門に見出すという見通しを持つに至った。

具体的には、中国の明末江南で出版業が盛行した結果、書物や多くの文物が日本に舶載され、林家林門の漢学者たちがそうした新しい潮流に敏感に反応していたことに注目した。そして、高濂の『遵生八牋』(養生書)、陳繼儒の『宝顔堂秘笈』(叢書)、梁橋の『氷川詩式』(詩論書)、あるいは各種文物(詩箋などの文具や琴)の流入と影響について調査研究を進め、「近世初期における『遵生八牋』受容——丈山・三竹・読耕斎を中心として——」(『近世文芸 研究と評論』54号、1998)、「近世前期における陳繼儒の影響——三竹・丈山・鷺峰・読耕斎を中心に——」(『近世文学研究の新展開』、2004)、「『童蒙詩式』考——近世前期の漢詩作法書一斑——」(『近世文芸 研究と評論』71号、2006)等にまとめ、発表した。

2. 研究の目的

本研究では、林鷺峰を中心とする近世前期の林家林門とその周辺の漢学者たちの伝記的事実を明らかにし、従来「社交風流」と批判されてきた鷺峰たちの文芸活動が、実際はお互いを繋ぐ重要なコミュニケーションの手段となっていたことに注目する。つぎに、彼らのネットワークの中では、当時最新の中国明末文化の影響による価値観や情報が、広く共有されていたことを明らかにする。そして、そこに当時の漢学者たちの文学史的・文化史的な意義を積極的に見出すことを目的とする。併せて、同時代の漢学者たちの文献の調査・発見・翻刻を積極的に行うことも目的とした。

3. 研究の方法

鷺峰の交遊範囲を具体的に調査するため、『鷺峰林学士文集』『鷺峰林学士詩集』の内容を精査することとした。

また、鷺峰が『本朝通鑑』編纂中に記した『国史館日録』を調査し、その動向に関連する記述を調査することとした。

さらに、鷺峰と関係の深い人物たちとして、林羅山(『羅山林先生集』)、林読耕斎(『読耕先生文集』『読耕先生詩集』『読耕先生外集』)、林梅洞(『梅洞林先生文集』『自撰梅洞詩集』『梅洞林先生詩続集』)、林鳳岡(『鳳岡先生全集』)、人見ト幽(『林塘集』)、人見竹洞(『竹洞先生詩文集』)、石川丈山(『新編覆醬集』『新編覆醬続集』)、野間三竹(『柳谷集』)、加藤勿斎(『錦囊集』、『東海集』)らの、個人詩文集を中心に、その内容を調査することとした。

以上の調査のうち、とくに『鷺峰林学士文集』『鷺峰林学士詩集』については、登場する人物に注目し、「『鷺峰林学士文集』・『鷺峰林学士詩集』主要登場人物一覧(稿)」を作成しながら作業を進めた。完璧な内容にすることは困難だが、詩文集中に登場する人物たちの検索を、ある程度可能にすることがその目的である。

さらに、近世前期漢文学という領域は、従来注目を集めていない分野であるため、新資料の発見にも留意しつつ研究を進めた。そして、近世前期の漢文学に関する資料を、デジタルカメラによる写真撮影、あるいは複写、または購入によって収集することとした。また、収集した資料は、翻刻・影印等によって公開を進めることとした。

4. 研究成果

本研究では、「研究の目的」で指摘したとおり、近世前期の林家林門の漢学者たちが、詩文による自己表現によるコミュニケーションを持っていたこと、また彼らのネットワークで共有されていた価値観や情報が、中国明末に活躍した「山人派」文人たちの隠逸趣味・文人趣味から強い影響を受けていたこ

と、そして従来は近世中期以降の問題とされてきた「江戸文人」の萌芽を早く近世前期の林家林門に見出すことができること、を鷲峰の交遊圏に関わる情報を整理する作業を通じて検討した。

このことは、「1. 研究開始当初の背景」で指摘した(1)の見方のように「詩人」として近世前期の漢文学者たちを評価しようとするのではなく、広く文化史的な価値観で林家林門の漢文学者たちを評価しようとした結果である。

また、文人趣味の萌芽を近世前期の林家林門に見出すことは、やはり「1. 研究開始当初の背景」の(2)で指摘した、彼らに対する偏った考え方を見直す結果となった。

具体的には、まず、明末の「随筆」の受容の問題を取り上げ、「山人派」文人たちの文化が当時の林家林門の人々に及ぼした影響の大きさを検討した（「近世前期における明末「随筆」の受容——『徒然草』受容の一側面——」、『湘北紀要』32号、2011）。

これは、明末の「小品文」ブームの影響で舶載された「随筆筆記類」を受容することで、当時はまだ一般的でなかった「随筆」というジャンルが次第に定着していったことを指摘したもので、近世期に入ってから『徒然草』が俄に注目を集めるようになるのも、そうした状況を背景に置いて考えることができるのではないかと論じたものである。

また、石川丈山の杜甫受容について、丈山自身の詩文を材料に検討を加えた（「丈山の杜甫受容——「拙」をキーワードとして——」、『和漢比較文学』48号、2012）。

そもそも、丈山が高く評価されている理由の一つに、杜甫の価値を早くに認めたことがある。その丈山の杜甫受容については、当時日本に流入していた中国の詩話・類書から強く影響を受けていたことが、従来の研究で指摘されてきた（中村幸彦「石川丈山の詩論」、『中国古典研究』19号、1973）。

前述した明末の随筆や筆記の類と同様に、類書、詩話といった書籍も、やはり多く舶載されていた。しかし、その直接的影響下にあったのであれば、多くの詩話にそう書かれているように、丈山は杜甫を「忠君愛国」、「憂民憂国」、「詩史」の詩人として見ていたはずである。

しかし、実際に丈山の詩を検討すると、丈山は杜甫をそのように見ていたのではなく、陶淵明と並べて「隠逸」の詩人と捉えていたことが明らかになった。これは、鷲峰が杜甫を詠んだ詩の中で、好んで「藹然忠義」という言葉を用いていることと対照的である。

ただし、丈山が志向した「隠逸」は、林家林門の人々が志向した「隠逸」と同じく、儒教の価値観で善いとされる中国の士大夫の生き方に範を求めるものであったことも、同

じく明らかとなった。つまり、丈山はけっして孤高の存在であったわけではなく、しっかりと林家林門の面々と「社交風流」の世界で遊んでもいたし、その丈山が志向した「隠逸」は、鷲峰や読耕齋、あるいは野間三竹といった林家林門の面々が志向した「隠逸」と価値観を共有していたのである。

さらに、本研究では、多色摺資料として美術史・俳諧史との関連からも重要視される詩箋資料や、従来ほぼ注目されることがなかった林永喜や石川子復の自筆資料など、調査の過程で見出すことができた貴重な文献を翻刻・紹介した。

とくに、羅山が孫の梅洞との詩の贈答に使用した明末の詩箋資料（『文敏先生遺墨』）は貴重である。これらは、やはり「1. 研究開始当初の背景」の(3)で指摘した研究環境の不足を多少なり補う成果である。

以上の研究成果は、「5. 主な発表論文等」に記した他に、「江戸教養人の遊び 元禄時代の文人趣味」（東武カルチャ「向島文化サロン」2011、於：東武博物館ホール）、「中国の詩箋と俳諧資料の多色摺」（隆盛寺「第二十三回隆盛寺蔵 芭蕉翁と元政上人展講演会」2013、於：隆盛寺）の、一般者向けの講演会でも発表することができた。

また、研究成果の一部は「近世前期における明末文化と江戸文人の発生」として早稲田大学に提出した学位請求論文にも反映させることができた。

さて、今後の展望だが、やはり以上の方向性で検討を重ねていくことが、これからも有効であると考えられる。まだまだ問題として取り上げるべき資料には事欠かない。つまり、「1. 研究開始当初の背景」の(3)で指摘した研究環境の不足は、まだ何ら根本的な解決を見たわけではない。

また、未開拓の問題として、黄檗文化の影響を検討する必要もあるだろう。日本に流入してきた黄檗文化も、広い意味では明末文化の一端であろう。しかし、その影響の大きさを考えてみれば、やはりそれとして本格的に取り組んで検討しなければならない問題である。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

①伊藤善隆、近世前期における明末「随筆」の受容——『徒然草』受容の一側面——、湘北紀要、査読無、32号、2011、四五頁—五七頁

②伊藤善隆、石川子復自筆懐紙（延宝二年一月付）の紹介、太平詩文、査読無、50号、2011、17頁—21頁

- ③伊藤善隆、丈山の杜甫受容——「拙」をキーワードとして——、和漢比較文学、査読有、48号、2012、72—90
- ④伊藤善隆、林永喜「寛永十五年の夏」和歌懐紙の紹介、湘北紀要、査読無、33号、2012、一頁—八頁
- ⑤伊藤善隆、近世前期における『円機活法』受容一斑——『詩苑綺繡』・『詩林要玄』——、湘北紀要、査読無、34号、2013、一頁—一二頁
- ⑥伊藤善隆、多色摺の源流——林羅山の詩箋資料——、『図説 江戸の〈表現〉——浮世絵・文学・芸能——』八木書店、査読有、未刊

〔学会発表〕(計3件)

- ①伊藤善隆、丈山の杜甫受容——「拙」をキーワードとして——、第三十回記念和漢比較文学学会大会、2011、9、24、於：筑波大学大学会館
- ②伊藤善隆、明末詩箋の流布と影響——付『文敏先生遺墨』について——、近世的表現様式と知の越境プロジェクト2011、12、17 於：国文学研究資料館
- ③伊藤善隆、多色摺の源流——中国詩箋と林羅山——、近世的表現様式と知の越境プロジェクト、2012、9、28、於：国文学研究資料館

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

とくにナシ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 善隆 (ITO YOSHITAKA)
湘北短期大学・総合ビジネス学科・准教授
研究者番号：30287940

(2) 研究分担者 ナシ

研究者番号：

(3) 連携研究者 ナシ

研究者番号：